比治山大学紀要，第 21 号，2014
Bul. Hijiyama Univ. No.21, 2014

遺跡の調査を通じた教育活動と地域貢献

Educational Practice and Community Service through Archaeological Field Work

安　間　拓　巳
Takumi AMMA

現代文化学部言語文化学科日本語文化コース考古学研究室で実施している，遺跡の地形測量調査を通じた教育活動と，地域貢献に向けての取り組みについて報告する。

遺跡の調査は共同作業である。効率よく円滑に作業を進め，一定の成果を収めるためには，参加者各々の自主性や積極性，責任感，協調性やコミュニケーション力などが求められる。そのため，遺跡の調査は，これらを培う一つの効果的な方法だといえる。そして，これらの資質は，学生たちにとって卒業後にも必要不可欠なものであり，調査に参加することで身につけてもらいたいと考えている。

また，未公表の遺跡資料を調査・報告することは，遺跡のある地域の歴史や文化を地元の方々に再認識・再発見していただくことにも繋がる。こうした活動を通じて，地域貢献の役割も果たしていきたいと考えている。

はじめに

現代文化学部言語文化学科日本語文化コース考古学研究室では，毎年夏季休業中を利用して，学生諸君と共同で遺跡の調査を行っている。調査は教育・研究・地域貢献の三つの点に留意して実施しているが，研究面の成果については，これまでに本学の紀要などで公表してきたところである。そこで本稿では，調査を通じた教育活動ならびに地域貢献について報告したいと思う。

1. 調査の概要

まず，研究室で調査を行っている遺跡と調査方法について簡単に述べておく。

(1) 調査遺跡

これまでに調査を実施した遺跡の概要は以下の通りである。各遺跡の詳細については，これまでに公表した報告を参照していただきたい。

a. 中馬八ッ塚古墳群（安芸高田市吉田町中馬）

古墳時代後期の古墳群である。1～5・11号墳の調査を実施した。大半は筆者が地域文化政策学科に所属していた時期に調査を行ったが，言語文化学科に移ってから5号墳の補足調査を行っている。

b. 明官地古墳群（安芸高田市吉田町中馬）

古墳時代後期の古墳群である。筆者が地域文化政策学科に所属していた時期から継続し，これまで1～5号墳の調査を実施している。今後も6号墳以降の調査を継続していく予定である。

c. 尾津谷西古墳群（安芸高田市甲田町下小原）

古墳時代後期の古墳群である。8～10号墳の調査を実施した。

d. 小見谷製鉄遺跡群（北広島町上石）

20ヶ所以上の遺跡が確認されている，中世の製鉄関連遺跡群である。これまでに水釜迫製鉄遺跡，大草3号製鉄遺跡・炭窯跡，鑪ヶ谷第2製鉄遺跡の三遺跡の調査を実施し，今後も調査を継続していく予定である。

(2) 調査方法

考古学の野外調査には，よく知られた発掘調査のほかにも，野山を踏査し，土地の表面観察や遺物の採集などにより遺跡の所在を確認する分布調査や，等高線を用いて遺跡の現地形や構造を把握する地形測量調査などがある。これらのうち，研究室で実施しているのは，主に平板測量と呼ばれる方法による地形測量調査である（図1・2）。

現在，各地で実施されている遺跡の地形測量調査では，トータルステーションと呼ばれる機器が使用される。これはコンピュータ機能を内蔵し，レーザー光の反射を利用して測量を行なうものである。この機器を使用すれば短時間で調査ができ，調査後の図面の処理やデータの保管が容易であるが，機材を一式揃えるのに数百万円の費用が必要となる。これでは一年のうちの夏季の間しか使用しない機材にしては高価すぎ，また，そもそもそれほどの費用は工面しようがない。しかも，図面作成の肝心なところはコンピュータが行なうので，機械の操作方法を覚えたとしても，地形測量の仕組みを真に理解し，作業が進むにしたがって図面上に地形が出来上がっていく楽しさを感じることはできない。

そこで平板測量である。これは平板と呼ばれる機材を用いて行なうもので，トータルステーションに比べれば，かなり旧式でアナログな道具である。しかし旧式でアナログであるが故に，むしろ地形測量の仕組みや考え方を理解しやすいという利点がある。また，教育的効果の面からも，学生が作業をする機材として相応しいと考えている。

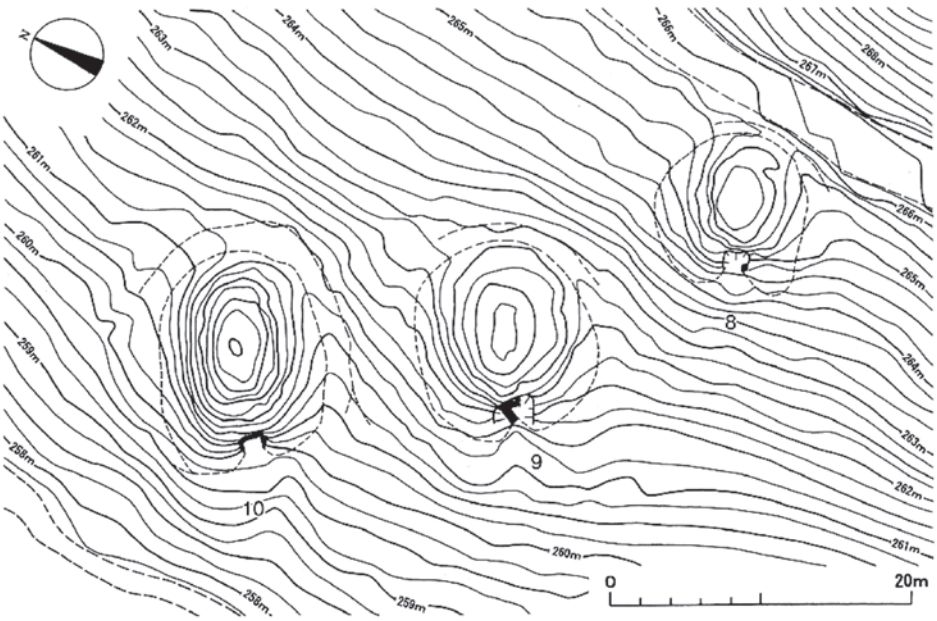


図1　尾津谷西古墳群地形測量図（2012年調査）

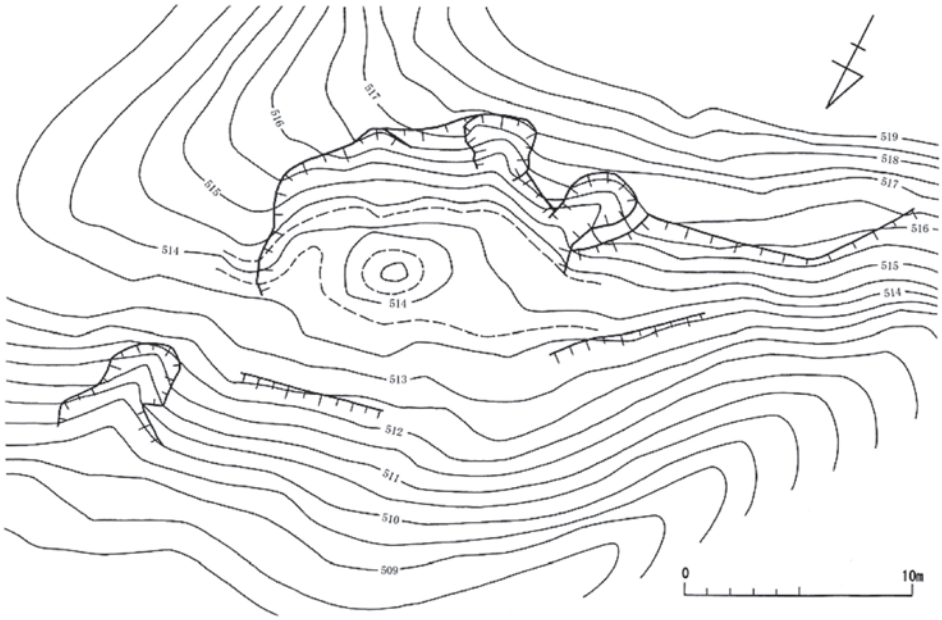


図2　鑪ヶ谷第2製鉄遺跡地形測量図（2014年調査）

2. 調査の教育的実践と期待される効果

(1) 事前学習と調査後のまとめ・感想

調査に向けて，毎年5月の連休明けくらいから参加者募集を始めている。募集は日本語文化コースで歴史・文化分野を学ぶ学生や，歴史・文化関連科目を受講している学生，学芸員資格取得をめざす学生などを中心に行なっている。その際，性別による制限は一切設けず，動機がしっかりしていて，やる気さえあれば誰でも受け入れるようにしている。ちなみに，希望者は男子学生より女子学生の方が多く，現場でも活発に動いてくれる傾向が強い。蛇足ではあるが，自分のゼミ生より他分野の学生の方が積極的かつ活動的なのが悩ましいところである。

初めて参加する学生は，もちろん地形測量作業をした経験はない。そこで，調査の意義や目的，作業手順などをまず学んでもらうため，大方参加者が固まった6月末か7月初め頃から事前学習会を数度開いている。前年などに経験した学生も，再確認のため参加してもらっている。そこでは，調査には教育・研究・地域貢献の意味があることを確認し，調査の概要，作業手順，現場での諸注意，道具の名称や取り扱いなどについて説明している。とくに調査の意義や目的については，学生諸君にも十分理解してもらいたいと思っているのであるが，一度話をしただけではなかなか理解できないであろうから，調査中もことあるごとに説明をするようにしている。

調査終了後には，参加者それぞれに，調査に参加したまとめや感想をレポートしてもらい，教育・研究・地域貢献の三点を踏まえながら，自身の作業の振り返りをしてもらっている。また，レポートの中で取り入れたほうがよいと思われる意見があった場合は，できることから以後の調査に反映させるようにしている。

(2) 調査現場での体験

a. チームワーク・協調性・コミュニケーション

考古学の野外調査は，決して一人ではできない。常に共同作業であり，チームワークが必要とされ

図3　平板測量作業風景

る。学術的にも意義のある成果を出すためには，現場での意見交換や意思の疎通が欠かせない。そこでは教員と学生，先輩と後輩といった立場や経験の有無は，一切関係ない。一人ひとりが対等な調査参加者であり，それぞれの意見が尊重されるべきものである。したがって，自分が思ったことは積極的に発言すると同時に，他者の発言にも耳を傾け，調査をより良い方向へ向かわせようとする姿勢が必要となる。また，それぞれに与えられた役割があり，それを的確に果たす責任も生じる。それを怠ると効率が悪くなって全体の作業が進まないばかりか，発掘調査ではただ遺跡を破壊するだけの行為となり，時には参加者の安全を脅かすことも起こりうる。調査を楽しんでもらうのは大いに結構だが，決して遊びや娯楽ではなく，あくまで学術活動であり，時には危険も伴うということは，事前学習でも強調しているところである。

地形測量調査も，各自が自分の役割をただ黙々とこなしているだけでは，決していい図面はできない。研究室で行なっている平板測量には，測点を探してそこにスタッフ（箱尺）と呼ぶ縦長の物差しを地面に立てる役，そのスタッフをレベル（一種の望遠鏡）で覗き，目盛りを読む役，平板の上でアリダード（方向を定める道具）を操作して図面上に測点を置き，等高線を描く役，スタッフと平板との距離を巻尺で測る役があり，通常三ないし四人一組で行なう（図3）。詳しい作業手順は省略するが，少々慣れが必要な，平板を測量杭に合わせて設置して操作する作業以外の，レベルの設置や操作，等高線を引くために必要となるレベルの標高の算出（眼高計算），スタッフと平板との距離の計測などは，できるだけ学生にやってもらうことにしている。そして，各々がそれぞれの役割のなかで考えを述べ，地形を観察して意見を交換しながら，全員で考えて図面を完成させていくのである。

本学の学生の特徴として，自主性やコミュニケーション力が弱いと言われることが多い。筆者も常々感じていることであるが，上記のような性格をもつ考古学の野外調査は，それらを克服する一つの方法になるのではないかと考えている。作業チームの中に，学年や学科・コースが異なるよく知らない学生がいても，作業を進めるためにはどうしても会話をしなければならない。また，支援・協力してくださる教育委員会や地元の方々などが調査現場を見学に来られたときにも，できるだけ学生に対応してもらうことにしている。こうした体験を通して，学生たちが自主性や協調性，責任感，コミュニケーション力などを培ってくれることを期待している。そして，これらの力は卒業した後にも必要不可欠な資質でもあるので，調査を利用してぜひ身につけていってもらいたいと考えている。

b. 自然体験

野外調査は自然の中で行なう。研究室で調査を実施している遺跡は，いずれも山中にある。普段，街中で生活している学生にとっては，そこはまったくの異空間であろう。

現場は，駐車地からの往復も含め，平坦地であることはまれで，大抵が斜面であり，足場も悪く，時にはかなりの急傾斜になることもある。こうした悪路や斜面地に慣れていない学生にとっては難渋

このうえなく，当初は精神的・肉体的疲労や筋肉痛も感じることもあるであろう。それでも足場の不安定な斜面に足を取られながらも果敢に挑み，これまでも立派な図面を完成させてくれている。また，「ムシが苦手」「ヘビが嫌い」という学生は必ずいるが，そんなものはお構いなしにスズメバチやアブは飛んでくるし，ヘビは草叢から不意に這い出てくる。学生たちにしてみれば，これまた迷惑このうえないのであろうが，それでも作業は続けなければならない。そうかと思うと，ときに野生のシカやヤマドリ，キツツキなどが思いがけず顔を見せてくれることもあり，一種感動を覚える瞬間もある。クマと鉢合わせだけはご免蒙りたいと願っているが…。

さらに，天候もさまざまで，猛暑の日が続く年もあれば，雨が多く，予定通り作業の進まない年もある。急な降雨に見舞われるのは毎度のことで，その場合は，慌てて機材を撤収して下山しなければならない。気持ちは焦るが，雨に濡れた土の斜面は滑りやすく危険であり，思うように歩を進めることはできない。このように，自然相手では普段は体験しないようなことが多く，自分の思うように作業が進まないこともある。しかし，こうした苦労や感動を味わいながら，自然の中での作業体験をすることも，重要なことであろうと考えている。

c. 歴史・文化体験

歴史・文化の分野は，室内で文献を読んで知識を習得するだけでは，決して学んだことにはならない。必ず現場に行くことが重要で，考古学はとくにその特性が強い。

一日限りの遺跡見学とは異なり，遺跡の調査は何日にもわたって一つの遺跡にかかわるため，最初はわからなかったことがしだいに理解できるようになったり，反対に疑問が深まっていったりする。「いつ」「何故」「何のために」「どうやって」など，遺跡の上で思いをめぐらすことが，知識の習得と同じく重要なのである。そうした思考方法が身につき，日常生活のさまざまな場面で応用されることにより，学生たちが自分で課題を考え，より自主的・積極的に行動できるようになることを期待している。

また，調査を実施しているのは県内の遺跡であり，事前学習や調査を通じて地域の歴史・文化に触れる貴重な機会となっている。例えば，近世のたたら吹製鉄に代表されるように，中国地方では古墳時代から明治時代に至るまで鉄生産が盛んに行なわれてきたが，小見谷製鉄遺跡群の調査では，中世における鉄生産の歴史を学び，製鉄作業の行なわれた場の雰囲気を感じることができる。遺跡に立ちながら，「何故，この場所で操業したのか」「誰が作業したのか」「いつ操業したのか」「原料や燃料はどこから調達したのか」「人びとはどこで生活していたのか」など，さまざまな思いを巡らし，考えることが，地域の歴史・文化をより深く知ることにも繋がるのである。

3. 調査を通じた地域貢献

開発事業に伴って行政機関が行なう調査とは異なり，大学の研究室が行うような野外調査は，遺跡のある地域や教育委員会の方々からの理解と支援，協力が欠かせない。地元の方々からの理解や協力が得られなければ，遺跡地に立ち入ることすら許されないこともある。したがって，調査を許可していただいている以上，教育や研究という大学側の都合や事情だけでなく，調査を行うことで何かしら地元に還元するものが必要であると考えている。その一つは地元の要請による調査の実施であり，もう一つは調査成果の地元への報告であると考えている。こうした活動を通じて，今まで知られていなかった遺跡や遺物資料を明らかにし，地域の方々に地元の歴史・文化を再認識・再発見していただくことが重要であり，これが大学の考古学研究室による地域貢献の一つの形ではないかと考えている。

これまで研究室で実施してきている調査は，いずれも研究室側の教育・研究目的と遺跡が所在する地域や自治体からの調査要請とが合致したものである。明官地古墳群の調査は，古墳の地形測量調査

の成果と，博物館に未公表のまま保管されていた出土遺物とを合わせて調査，報告することで，地域の歴史・文化の再認識や再発見に貢献している。尾津谷西古墳群と小見谷製鉄遺跡群の調査は，地域の方々からの調査依頼に応えるかたちで実施したものであり，遺跡の詳細を明らかにし，その成果を報告することで要請に応えている。

調査の経過や成果については本学の紀要，県内の考古学関係者による研究誌『芸備』，広島史学研究会考古学部会での調査研究報告などを通じて，考古学関係者に向けて報告してきている。それと同時に，安芸高田市歴史民俗博物館での公開講座を通じた中馬八ッ塚古墳群・明官地古墳群の調査成果の報告（平成23年9月実施），地元の方々向けの小見谷製鉄遺跡群の調査報告会（平成26年8月実施）などを通じて，地域へ向けても調査成果の報告を行なっている。地形測量という調査の性質上，毎年大きな成果が得られるというわけではないため，頻繁に報告会を実施するということにはならないが，少なくとも地元の教育委員会の担当者には，その年の調査結果を報告するようにしている。また，明官地古墳群や小見谷製鉄遺跡群では調査を継続中であり，今後もある程度調査成果が積み重ねられた段階で，再び報告会を開催するつもりでいる。

また，近年では地域の歴史・文化遺産が，地域活性化の重要な資源として取り上げられることも多くなってきている。研究室で調査を実施している遺跡は，それぞれの地域における歴史・文化遺産として重要なものであり，今後それらを活用した地域起こしなどが計画されるかも知れない。その時には，調査の成果が基礎的な資料の一つとなる。長期的な視点ではあるが，こうした点においても地域貢献の役割を果たしているものと思っている。

なお，調査の様子については，これまでに二度中国新聞紙上に取り上げていただいた（文末の資料を参照）。これも遺跡の重要性を広く市民・県民に知っていただくために有効な方法であり，地域貢献の一つといえるであろう。と同時に，地域における大学の活動の広報にも一役買っているのではないかと考えている。

4. 調査活動の課題

今後も調査を継続していくうえでの課題と考えている点について述べておきたい。

a. 安全管理

何といっても，現場への往復も含めた調査での安全管理である。調査現場までは筆者が車を運転して移動しているが，こうした行き帰りでの事故や調査現場での怪我，熱中症などには細心の注意を払っている。事前学習や調査中にも「現場では走らない」「後ろ向きに動かない」「段差を飛び降りない」「体調が悪い時には無理をせず，すぐに報告する」などの注意を再三行なっている。幸い，これまで大きな事故や怪我もなく実施できているので，引き続き安全に気を配りながら活動を継続していきたい。

b. 調査の目的や意義に対する理解

調査の目的や意義については，事前学習や調査中に話をするのであるが，まだ十分理解されていないように感じている。調査報告が公表されれば，それは永久にこの世に残るものであるし，遺跡の基礎資料として非常に価値の高いものなのだと言ってはみても，自分たちがそれらを形作る重要な作業に携わっているという意識は薄いようで，どこか他人事のように聞いており，歯痒く感じる。本学の学生らしいと言ってしまえばそれまでなのだが，現場に行って指示通りに作業を行えば，ある程度結果はついてくるとはいえ，せっかく夏の暑い中苦労して作業するのであるから，自分たちがしていることの目的や意義をより明確に意識して，調査を有意義なものにしてもらいたいと考えている。そうした作業に携わっていることを自覚した上で調査を成し遂げることができれば，学生たちの中に何がしかの自信が生まれてくるのではないかと思う。そのためには，事前学習を筆者が話をするだけでは

なく，参加者が主体となって，自分たちの活動の意味を考え，報告し合う場を設けることも必要ではないかと考えている。

c. 調査に対する自主性の育成

調査にはいろいろな役割があり，作業手順がある。それらを筆者の指示を待ってするのではなく，学生が自主的に学び，理解して作業ができるようになってもらいたいと考えている。そうすることで作業効率が上がり，より円滑に調査が実施できるようにもなる。今は筆者が行なっている平板の設置や操作も，かつては学生がやっていた時期もあり，やればできるはずなのである。

ただし，この点については筆者の反省もある。現在調査を実施している北広島町の小見谷製鉄遺跡群までは，片道で最低80～90分程度の時間がかかる。昼食は山中から人里へ出なければならず，その移動や食事の購入と飲食，休憩時間などを含めると，最低90分が必要である。また，帰路の交通渋滞や学生の帰宅時間を考慮すれば，夏季といえどもあまり遅くまで作業はできない。そもそも山中であるので暗くなるのが早く，調査現場から駐車地の林道まで降りる際の安全性を考えれば，あまり遅くまで調査はできない。丸一日快晴であったとしても，調査に専念できる時間は意外に短いのである。そうなると，調査の進行具合や効率化を考えるあまり，つい筆者が焦って口を出してしまうことになる。天候が安定しない，あるいは人員が十分に確保できないなどの理由で調査が思うように進展していない時はなおさらである。調査を行なう以上，効率性や一定水準の成果を求めなければならないが，教育活動であるという面も十分に考慮して，できる限り学生の自主性を引き出せるような調査活動となるように自戒しておきたい。

d. 参加者の確保

参加者は筆者のゼミ生や日本語文化コース，学芸員資格取得を目指す学生を中心に募っている。現在までのところ，参加希望者が不足して調査が実施できない事態には至っていないが，その可能性は常に内包している。日本語文化コースでのゼミ分属の際には，できる範囲で調査への参加を求めているが，強制できることではないので，必ずしも当てにはできない面もある。もっとも強制参加としたところで，行きたくもない調査に参加し，渋々作業をするような学生とやる気のある学生が効率よく，円滑に共同作業をするのは無理な話であるし，そもそも調査は強制されてする類のものではない。幸いにして参加希望者は一定数確保できているので，調査の意義や魅力を伝えつつ，しばらくは同じやり方で参加者を募っていきたい。

e. 年間を通じた活動

現在，調査は原則として夏季休業中にだけ実施し，それ以外の時期は何の活動も行っていない。調査開始当初は，遺跡の調査のみが目的であったのでそれでもよかったが，これまで調査を続けてくることができているので，さらに一段階高いところへ進む時期ではないかと考えている。すなわち，遺跡の調査を一つの材料として，より充実した学生の学びの場をつくり出せないかということである。そのために，夏季の調査だけでなく，年間を通じた活動を行うことを検討している。活動と言っても難しいことをするのではなく，調査参加者を中心に地域の歴史や文化を自ら学び，発表する機会がある課外活動あるいはサークル活動のようなものができないかと考えている。そうすることにより，学生による学習の機会が増えるとともに，地域の歴史・文化に対する理解や知識が深まり，日本語文化コースの歴史・文化分野がより充実したものになっていくと同時に，調査参加者の安定した確保にも繋がることが期待できる。

f. 必要経費の確保

地形測量調査は，発掘調査に比べてかかる経費は安い。測量機材一式を揃えてしまえば，毎年必要なのは文具類や図面用紙くらいのものである。ただし，問題となるのは旅費である。現在，調査現場までの往復は筆者がレンタカーを借りて，参加者や機材を載せて往復している。レンタカーを借りる

のは，その日の参加者が5名を超えると自家用車では全員を乗せられないからである。せっかくやる気のある学生を断るのも申し訳ないし，何と言っても作業には人数が多い方が望ましい。学生5名と筆者を合わせた計6名で作業ができれば，測量チームを二組つくることができ，作業能率はより高くなる。したがって，多人数に対応できるようにレンタカーを借りるのである。レンタカーは7～8人乗りの車を5日間借りると約7万円の費用がかかる。一遺跡の調査に通常12～15日はかかるので，合計で15～20万円程度の経費が必要となる。平成25年度までの数年間は，学内共同研究費の交付を受けていたため，旅費の心配をすることなく調査を行なうことができた。大学当局には感謝申し上げたい。しかし平成26年度は，規程の改定や，それまでにも連続して共同研究費を交付されたということで，採択されなかった。幸か不幸か，今年度は例年にない天候不順のため，まとまった人数が参加できるような形態での調査が実施できず，少人数による調査となった。そのため，レンタカーを借りることはなかったが，平成27年度以降は，これまでどおりのやり方で調査を実施する予定である。大学の個人研究費（教育研究旅費）を調査に充てても，すべてを賄うことはできず，そのうえ各地で開催される学会や研究会には自費で出席せざるを得なくなることは明らかで，思案のしどころである。そうはいっても，旅費が確保できないから調査を実施しないという選択肢は持ち合わせていない。何らかのかたちで費用を捻出し，来年度以降も調査を継続していく所存である。

おわりに

現在研究室では，上記のような野外調査以外にも，福山市神村町西山西窯跡（7世紀後半～8世紀前半に操業された須恵器窯跡）採集資料の整理・調査を実施している。これも地元の方々の要望によるものであり，当初は筆者一人で行っていたが，最近作業に参加してくれる学生が現れ，少しずつ活動の輪が広がってきていると感じている。

人文系の学問分野は，大抵がそうであろうが，何かしらの意図をもった教育活動を行っても，結果はすぐには現れないことが多い。野外調査を通じた教育活動についても同様であろうと考えている。たった一度や二度の調査体験で，社会で必要とされるような基礎的な資質がどの程度身につくかは定かではないが，やらないよりはやったほうがよいと信じて活動を続けている。

調査に参加した学生と卒業後に会った時，「今年も調査に行ってるんですか」とか「また，行きたいなぁ」と言ってくれることがある。少なくとも，彼ら，彼女らにとっては野外調査が学生時代のいい思い出なのであろう。このような場面に会うと，苦労は多いが，調査を続けることは無駄ではないのだと思えてくる。ただ，今後は楽しい思い出だけでなく，「調査で大変な思いをした経験が役に立ちました」とか「調査に参加したおかげで，人と話すことがあまり苦にならなくなりました」というような声が聞こえるようになればと思う。

これまで公表できた調査報告は猛暑や降雨，ムシやヘビ，滑りやすい斜面などと格闘しながら作業をしてくれた学生たちの活動があったればこそである。改めて，彼ら，彼女らの調査に対する真摯な取り組みと奮闘を心から讃えたい。また，調査に協力・支援していただいている地域や教育委員会の方々にも，深く感謝申し上げる次第である。

二～三年で参加学生の顔ぶれが変わり，気質も違ってくる。今まで通じていた指示や指導のやり方が通用しない年もある。試行錯誤の連続である。それでも学生たちが何かを感じ取ってくれることを期待して，根気強く，今後も教育・研究・地域貢献を意図した地形測量調査を継続していきたい。そして，いつかやる気のある学生たちと，楽しく有意義な発掘調査と報告書の作成作業が実施できればと思っている。

【調査報告】
脇坂光彦・安間拓巳「中馬八ッ塚古墳群の測量調査報告」『芸備』第38集，芸備友の会，2010
安間拓巳「安芸高田市吉田町　明官地第1号古墳の測量調査報告」『比治山大学現代文化学部紀要』第17号，比治山大学現代文化学部，2011
安間拓巳「安芸高田市吉田町明官地古墳群の調査研究（1）－第1号古墳の墳丘と出土遺物の調査－」『芸備』第39集，芸備友の会，2011
脇坂光彦・安間拓巳「中馬八ッ塚5号古墳の測量調査報告」『芸備』第41集，芸備友の会，2012
安間拓巳「安芸高田市吉田町　明官地第2・3・4号古墳の測量調査報告」『比治山大学現代文化学部紀要』第18号，比治山大学現代文化学部，2012
安間拓巳「安芸高田市吉田町明官地古墳群の調査研究(2)－第2･3･4号古墳の墳丘と出土遺物の調査－」『芸備』第43集，芸備友の会，2013
脇坂光彦・安間拓巳「尾津谷西8・9・10号古墳の測量調査報告」『芸備』第43集，芸備友の会，2013
【研究発表】
安間拓巳・八幡浩二・手島智幸「福山市神村町西山西窯跡採集資料の調査報告」『平成25年度広島史学研究会考古学部会』2013（研究発表ならびに発表要旨）
安間拓巳「北広島町小見谷製鉄遺跡群の調査研究」『平成26年度広島史学研究会考古学部会』2014（研究発表ならびに発表要旨）

大草3号製鉄遺跡・炭窯跡近景（2013年調査）

〈キーワード〉
考古学，地形測量調査，教育活動，地域貢献，歴史・文化

安　間　拓　巳（言語文化学科日本語文化コース）

（2014. 11. 4　受理）

（11）文化　2012年（平成24年）8月23日（木曜日）　中国

安芸高田 文化圏の境界

比治山大准教授ら古墳測量調査

畿内・山陰 双方の石室構造

尾津谷西古墳群の古墳上で測量を進める脇坂さん㊨と安間准教授㊧。右下が石室入り口　（安芸高田市甲田町）

古墳時代、現在の安芸高田市は畿内と山陰の勢力・文化がぶつかる境界だった―。広島県内有数の古墳分布エリアの地域像が、埋蔵文化財調査に携わってきた元県職員脇坂光彦さん(67)と比治山大の安間拓巳准教授（考古学）の調査で浮かんでいる。古墳後期（6～7世紀）の古墳測量を6年にわたって続け、石室構造の違いなどから明らかになった。

今夏は13日から同市甲田町の尾津谷西古墳群の8～10号墳を測量。同大生も参加し、古墳の形や大きさ、横穴式石室の構造を調べている。

測量を終えた10号墳は長径約15㍍の長円形と判明。遺体を埋葬した石室奥の玄室へ至る通路両側に門柱状の石があり、出雲など山陰系の玄門式石室と分かった。玄室をふさいだ扉石とみられる板状の石も一部残存。県内での確認はまれという。

調査は2006年から続く。尾津谷西の西約8㌔にある同市吉田町の中馬八ツ塚、明官地古墳群も調べ、それぞれ11基の円墳を確認。うち計7基の横穴式石室は、入り口や通路の幅に比べて奥の玄室が広い畿内系の片袖式石室だった。

安芸高田市は今も山陰と山陽を結ぶ国道54号などが通る交通の要衝。脇坂さんと安間さんは「地理的に地方勢力の出雲と中央の畿内の影響を受けやすい地域だった」と捉え、それが古墳のスタイルに表れているとみる。

同市には県内の古墳の約1割に当たる約千基が分布している。1967年刊行の文化庁「全国遺跡地図（広島県）」などに記されているが、全体調査のため「測量が不十分で、見落とされた古墳もある」（県教委文化財課）。これまで8基とされた中馬八ツ塚は、脇坂さんらの調査で新たに3基が見つかった。

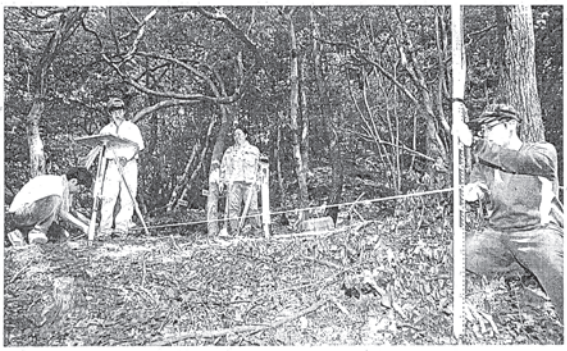
「地域の政治状況や歩みに迫る上で古墳の正確なデータは重要」と脇坂さんらは調査成果を考古学雑誌「芸備」などで発表。中馬八ツ塚、明官地古墳群そばの畿内系寺院・明官地廃寺跡（7世紀後半）にも注目し、古墳を築いた集団が寺院造営に関わった可能性を指摘している。（林淳一郎）

資料1　2012年8月23日（木）付　中国新聞

2013年（平成25年）8月28日（水曜日）　文化（12）

中世の製鉄 解く鍵に

たたら製鉄が盛んだった中国山地。広島県内で最も多く製鉄遺跡が残る北広島町で、比治山大の安間拓巳准教授（考古学）が遺跡の測量調査を進めている。同町の製鉄遺跡の大半は未発掘で詳しい操業年代がつかめていない。測量の結果、中世にさかのぼる遺跡が相次いで確かめられており、有力武士吉川氏が本拠地とした一帯の産業史に迫る上で注目される。（林淳一郎）



大草第3号たたら跡を測量する安間准教授（左から2人目）たち

比治山大・安間准教授 北広島で遺跡測量

国史跡・吉川元春館跡（16世紀後半）から南西に約1・5キロの同町上石地区。谷筋に約20遺跡が連なる小見谷製鉄遺跡群のうち、今夏は大草第3号たたら跡を調べている。

山の斜面がテラス状に削られた約280平方メートルを専用器具で測量。土の高まりやくぼみを等高線で図面に表す作業に比治山大生らと取り組んでいる。現在は土砂に埋もれているが、2基の製鉄炉があったとみられ、炉に風を送るふいご、砂鉄や木炭を置いた位置も推定できるという。

「詳しい年代は発掘しないと分からないが、炉の規模や立地状況から中世の遺跡とみていいだろう」と安間准教授。手掛かりになるのが、広島大や旧豊平町教委が1995年に発掘した中世の坤束製鉄遺跡（北広島町阿坂）などだ。

坤束では、山の斜面を削った平たん地から製鉄炉や砂鉄置き場跡などが出土した。科学分析による年代測定で13～14世紀ごろと判明。長さ4メートルにわたって掘りくぼめた防湿・保温施設の上に粘土で四角い炉を造り、砂鉄と木炭をくべて鉄を生産したとみられている。

吉川氏本拠地 産業史に光

安間准教授によると、近世の江戸期に製鉄炉は技術の発達に伴って巨大化し、広い作業場が築ける人里近くに移っていく。大規模操業は明治期まで続き、原料の砂鉄が豊富な中国山地は国内の鉄生産量の8割以上を占めたとされる。

「広島県遺跡地図」（県教委ホームページ）を見ると、同町は県内最多の245の製鉄遺跡が掲載されている。ところが、開発に伴う発掘調査などがされてこなかった小見谷製鉄遺跡群をはじめ209遺跡は「時代不明」。時代が記されているのは、坤束など中世の7遺跡と中世末―近世の1遺跡、近世の28遺跡にとどまっている。

そんな中、安間准教授は2011年から測量調査に着手。同じ小見谷にある水釜迫たたら跡も中世の特徴がうかがえるという。「測量でおよその時代がつかめ、遺跡の範囲や炉跡の位置なども分かる。地道なデータの蓄積が新たな発掘調査に役立つ」と強調する。

発掘後、復元されている坤束製鉄遺跡。奥中央が製鉄炉で、両脇にふいごが置かれた。手前は砂鉄置き場

学術団体「たたら研究会」の事務局がある広島大大学院の古瀬清秀教授（考古学）も「中世の製鉄に関する文献は近世に比べて乏しい。実態や変遷に迫るには考古学調査が鍵を握る」と話す。

北広島町は、鎌倉末期の14世紀から吉川氏が本拠としたエリア。戦国期に毛利氏との関係を深めた吉川氏は、芸北に一大勢力を張った。安間准教授は「製鉄は領主層を支える産業や経済に欠かせない要素だったはず。調査を続け、地域史の復元につなげたい」と意気込む。測量結果は順次、学術雑誌に発表していく。

資料2　2013年8月28日（水）付　中国新聞